

ゲムシタビン療法を受けられる患者さまへ

抗がん剤には、がん細胞の増殖を抑えたり、再発や転移を防いだりする効果があります。がん細胞と同時に正常な細胞にも影響を与え、それらが副作用として現れます。副作用の程度には個人差が大きいです。副作用について正しく理解して、安心して日常生活をおくることが重要です。

[投与スケジュール]

- ・ 3週間を1コースとして行います。
- ・ 点滴時間は約1時間です。

薬剤名	目的	点滴時間	1日目	8日目	9-21日目
デキサメタゾン(デキサート) + 生理食塩水50ml	吐き気を予防します。	15分	○	○	休
ゲムシタビン + 生理食塩水100ml	抗がん剤です。	30分	○	○	
生理食塩水50ml	点滴ルート内を洗い流します。	5分	○	○	

<点滴中の注意事項>

- ・ 抗がん剤が血管から漏れた場合、痛みと共に皮膚に潰瘍を生じてしまうことがあります。点滴部位に痛みや腫れ、赤くなったり、熱く感じるなど少しでも違和感を感じたら、すぐにスタッフにお知らせください。
- ・ まれではありますが、点滴中にアレルギー（過敏症）が生じることがあります。発疹、かゆみ、息苦しさなど感じた時にはすぐにお知らせください。
- ・ 点滴時間や薬剤は変更になることがあります。

[主な副作用について]

起こりやすいもの・特に注意が必要な副作用のみを記載しました。その他の副作用については、化学療法同意書を参考にして下さい。

骨髄抑制：白血球減少・赤血球減少・血小板減少

骨髄は骨の中心にある組織で、白血球・赤血球・血小板などの血液の成分をつくっています。骨髄にある細胞が、がん治療でダメージを受けると、これらの血液成分をつくり出す働きが正常に機能しなくなります。この副作用のことを骨髄抑制といいます。骨髄抑制の程度を見ながら、抗がん剤を休んだり、量を調整します。

① 白血球減少（好中球減少）：感染症

白血球の成分の一つが好中球です。好中球が減ると感染症にかかりやすくなったり、重症化しやすくなります。薬の投与後 1～2 週間で最低値になり、その後 1～2 週間かけて徐々に回復します。感染症予防対策を行い、感染症にかかった場合には早めの治療を開始することが重要です。

【対策・治療】

- ・マスクの着用、手洗い、うがいの実施、予防接種
- ・骨髄を刺激し、白血球を上昇させるフィルグラスチム皮下注射・ペグフィルグラスチム（ジーラスタ）皮下注射の投与。抗生剤の投与。

【すぐに病院へ連絡してほしい症状】

- ・38℃以上の発熱が続く時
- ・息苦しさ、咳、のどの痛み、排尿時痛があり、ぐったりしている時

② 赤血球減少（ヘモグロビン減少）：貧血

赤血球は体中に酸素を運ぶ働きがあります。低下すると、顔色が悪くなり、息切れ、めまいがでることがあります。薬の投与後2週間～1か月以降に出現します。白血球や血小板の減少に比べて緩やかです。

【対策・治療】

- ・激しい動きを避け、ゆっくりと動く
- ・輸血

③ 血小板減少：出血

血小板は血液を固まらせる成分です。低下すると、鼻血、歯肉出血、あざ等の出現や、採血後に血が止まりにくいなどの症状が現れることがあります。血液をサラサラにするお薬を服用中の方は特に注意が必要です。薬の投与後1週間後ぐらいから下がり初め、2～3週間で最低値になった後、3～4週間かけて回復します。

【対策・治療】

- ・やさしく鼻をかむ・やさしく歯を磨く、電気カミソリの使用、採血後の十分な止血
- ・輸血

悪心・嘔吐、食欲不振

味や嗅覚の変化、不安やストレスによる心理的な変化、便秘など、薬の直接作用だけでなく、さまざまな要因が関連しています。症状の程度には個人差があります。悪心は投与2日目から5日間ほど続く場合もあります。吐き気止めの薬で症状を軽減しやすくなっていますので、症状が強い場合や不安がある場合はご相談下さい。

【対策】

- ・吐き気止めによる予防・治療
頓服の吐き気止めは、我慢しないで早めに服用しましょう。
- ・食事制限がない場合、好きなものを少しずつ食べてください。水分をきちんととるようにしましょう。

【病院へ連絡してほしい症状】

- ・吐き気で水分がとれない状態

倦怠感

治療後、体のだるさや疲れやすさを感じやすくなります。

【対策】

休養を十分にとり、回復したら活動するなどメリハリのつけた生活にしましょう。特に初回投与時は、倦怠感の程度が分からないので、仕事や家事を休むことができるような環境を整えましょう。

皮疹

皮膚に赤みやじんま疹が現れる場合があります。

【対策】

- ・ステロイドの入った軟膏の使用
- ・アレルギー止めの内服薬の使用

【病院へ連絡してほしい症状】

- ・目の充血や口の中がただれている
- ・水膨れが複数できるような皮疹
- ・全身に広がる皮疹
- ・発熱を伴う場合

血管痛・静脈炎

薬が血管を刺激するため、投与している腕に痛み、腫れ、ピリピリ感がでることがあります。まれに遅れて数日後に出現することがあります。

間質性肺炎

まれに、抗がん剤の影響で肺炎を起こすことがあります。喫煙は発生リスクを上げるので、必ず禁煙して下さい。重症の場合は、生命に関わったり、回復しても継続的な酸素投与が必要な場合もあります。

【病院へ連絡してほしい症状】

- ・空咳（痰の出ない咳）
- ・息切れ、呼吸困難感（今まで歩けた距離が歩けない、上れた坂や階段が上れない）

<治療中の注意事項>

- ・抗がん剤は尿や便にしばらく（2-7日）の間残りますが、大量の付着でなければ、特別な対応は不要です。尿の飛散を防ぐために男性は腰かけて排尿して下さい。
- ・当院以外の病院や歯科を受診の際は、必ず抗がん剤を投与中であることを伝えて下さい。
- ・使い合わせに注意が必要なお薬や健康食品があります。新しい薬や健康食品を使用する時は、必ず薬剤師に確認をして下さい。
- ・緊急時は代表番号に電話をし、診療科とお名前をお知らせ下さい。
- ・抗がん剤治療にかかる費用に「高額療養費制度」が使用できる場合があります。詳しくは、ご加入の保健組合等にお問い合わせ下さい。また、治療費に関することを含む、がんに関する様々な相談をがん相談支援センター（1階5番「患者相談窓口」）で対応しています。

 045-576-3000（代表）

済生会横浜市東部病院 薬剤部作成

起こりやすい

投与当日：まれにアレルギー反応
息苦しさ、じんましん、発熱

自分でわかる副作用

吐き気、だるさ
食欲低下
便秘・下痢
しゃっくり・皮疹

1週目

2週目

3週目

4週目

口内炎
下痢

脱毛

手足のしびれ

骨髄への影響：貧血

肝臓、腎臓への影響

骨髄への影響：白血球、血小板の減少

検査でわかる副作用

起こりやすい

代表的な副作用が起きやすい時期